てんたかく…

「ねーねー。散弾の空薬莢拾いにいこー」
「厭だよ。なんでそんな恐ろしいことせなゃならんの？昼間でもそんなとこ入ってったら獣と間違われて撃ち殺される」
「じゃあ落ち穂拾いでもいーからさぁ」
「……拾うな」
「どーして？　お米は農薬漬けだから？」
「今日はそーゆーことにしておこう」
「じゃあ明日になったらいーの？」
「……昨日だったらよかったのにな。だいたい狩猟解禁日のニュースを見て短絡的に思い付きで言―ただけじゃないのか？」
「ぷーっ！　でも朝からてっぽーの音がするとわくわくするとか、空薬莢とか散弾とか拾いたいとか思わない？　思うでしょ？」
「強硬になってきたな……」
「……たまにはね。せっかくの秋晴れのいいお天気。天高く馬肥ゆる秋だってーのに……」
「なぜ馬が肥えるんだろうな？」
「そりゃ食欲の秋だもん。なにかどっかおかしいのっ！言っとくけど話そらしゃしないよ」
「秋はな、収穫の秋だ。けど、それは農耕民族にとってのみあてはまる」
「それがどーかしたのっ！」
「そう、どーかするんだ。騎馬民族にとっては収穫の秋の恩恵を受けられない。故に……どうする？」
「う……、馬を喰ったら旨かった……」
「騎馬民族がそんなことをするかっ！　それにだいたいしょーむないことばっか……ま、いい。それがお前に与えられた使命ならば、それはそれでこちらとしても受け入れ温かく見護ってやらねばならないことだろうし、まあ特別な時には馬を食べることもあったし……。うん？」
「だから、馬が襲うんでしょ？　その馬遣いの民族が…」
「騎馬だよ。別に馬に襲わせるんじゃない」
「頭馬人の国があるの？」
「だからっ！　騎馬民族が襲ってくるから気をつけましょうって標語なんだよ、昔の中国のっ！」
「なるほど」
「ちなみに頭馬人は江戸時代の瓦版に馬と人のハーフとして生まれたという記録が図入りで残っているものの、あやしすぎる話なので信用できないな」
「ふーん、ただ馬面の人が生まれただけだったんかも」
「とにかく、馬が肥えて騎馬民族が襲ってくる季節が秋。食欲が増したり文化的欲求が増すのも秋」
「そうそう行楽の秋で、山に紅葉狩りに行って紅葉の天婦羅を食べる。あんまりおいしくないから肥えられない。でもなんで天が高くなるの？　成層圏が分厚くなるわけ？」
「そんな空気の量が増すわけない。雲の位置が高層にあるようになるから高く見えるだけ。秋霖も明けたから今日は太陽光線を浴びてビタミンDを積極的につくらねばならないような気がするだろう」
「うん、外に行こう、そして河原に散弾の……？　あ、あああああーっっっ!!」
「おお、遂に気がついたか、太陽光線を浴びてビタミンを得るメリットよりも紫外線で皮膚を劣化させてしまうデメリットの方が勝っていることを！」
「……ちゃう。昨日だったらよかったのにな、はどーゆーことだったか訊かなくっちゃいけなかったのにぃ…。うるうるうううう、また話そらされているぅ」
「つまりぃ、今我々が存在すると仮定されるアインシュタイン、さらに量子力学の世界では時間は逆に流れないんだ。だが、かつてのニュートン力学に基く世界ならば、時間は逆に流れていてもよかった。加速度は距離を時間の二乗で割る。時間が負でも二乗で正となり成立してしまう。しかし時間が逆に流れたことはない。おかしいのでおかしくない物理学が求められた」
「だから逆流しないのね？」
「いや逆流する現象が認められていないから逆流しないと思うことにしているだけ。なんにせよニュートン力学は宇宙ではもはや成り立たないとはいえ、時間は常に正に流れるものと決め付けるのは厭だ。アインシュタンだって間違っているし。アインシュタインでは宇宙の末路はたったひとつの巨大なブラックホールになり宇宙は熱死、もし正反ニュートリノに質量があればまた宇宙は収縮を、ビッグバン目指しての収縮を始めるという。けれどもホーキングはブラックホールもまた自らエネルギーを放出して消滅すると解いた。しかしと言ってホーキングが正しい訳でもきっとない。最終的に神ならぬ人間ごときに宇宙はわからないのかなぁ」
「結局、宇宙はわからないから時間が逆に流れていても構わないのね」
「そう。誰か早く時間が逆に流れる現象を発見してほしい。ついでに四次元以降ｎ次元の次元の成立も認めてもらえるといいね。縦横高さの三つに時間という方向があるのが四次元だけれども、量子力学ではそれで水素原子の電子の運動を解くと円運動していないことになってしまう」
「つまり、回転焼きも食べられない」
「それどころか、惑星の運動だってどうなるものかわからない。地球が太陽系からどっか飛んでいってしまうか知れないし、逆に太陽にぶつかるかも知れない……」
「これがほんとのサンキスト」
「あ、そっか、ふうん」
「そう納得されても困る」
「ま、でも実際そうなっていないことから、四次元は存在し得ない、とは言いたくない。逆にまだ未知の理論によりその存在が確立することを望みたいね。それで晴れて昨日に戻れたならふるーい空薬莢を拾いにいっても全然構わないんだけれども」
「そ、確率、だから散弾の空薬莢拾いにいこー、今日はきっと確率論的に落ちている位置を特定できると思うんだ。ね、なんか興味をそそるでしょ？」
「それって特定すればするほど危険の確率も高まる…けどそうなるとどこに行こうが空薬莢が拾えたり散弾銃に撃たれたりする危険がないわけではない…なら別に河原に拾いにいっても…って、だいたい確立の字が違うっ！！」
「うーん、おしかったなぁ」

おしまい

Maki Rouel 1999,10,28